

東国文化自由研究レポート



研究テーマ

古墳時代の馬文化
～馬具の歴史と現代との比較～



伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

1年 2組 12番

氏名

坂口 碧

(返却希望)

1. テーマ設定の動機

古墳時代の様々な資料を調べるうちに、古墳には多くの馬に関する副葬品などがあることが分かりました。地名に“馬”という文字が使われている群馬県において、古墳時代から馬が人々の生活に重要な役割を担ってきたと感じました。1500年も前に、馬と共に暮らしてきた当時の群馬県の人々は、どのように馬と関わり、馬がどのような役割を果たしてきたのか、興味を持ちました。また、大陸から伝わってきた乗馬に関する文化について、馬具という視点で、当時と現在の違いなどを調べることで、当時の乗馬技術などを考えたいと思い、この東国文化自由研究の題材を「昔と現在の馬の比較」をテーマとして、調べようと思いました。

2. 調査方法

① 古墳の見学

- ・保渡田八幡塚古墳（写真1）

〒370-3533 群馬県高崎市保渡田町2000-1

- ・綿貫観音山古墳（写真2）

〒370-1207 群馬県高崎市綿貫町1572

② 博物館・資料館などでの情報収集

- ・かみつけの里博物館

〒370-3534 群馬県高崎市井出町1514 上毛野はにわの里公園

- ・群馬県立歴史博物館（写真3）

〒370-1207 群馬県高崎市綿貫町992-1 I.D.A 群馬の森

- ・インターネットでの資料、解説動画検索

③ 古代と現代の馬具の比較

- ・林牧場群馬県馬事公苑

〒371-0103 群馬県前橋市富士見町小暮2425



写真2：綿貫観音山古墳



写真1：保渡田八幡塚古墳



写真3：群馬県立歴史博物館

3. 調査結果

再現された古墳や博物館、資料館に行って次の様々な疑問や興味が湧き、詳細に調べてみました。

(1)なぜ群馬には古墳が多いのか。

古墳は、その地域の王や豪族の功績を称え、権力を示すために、作られたと考えられています。群馬県内にある古墳の数は、文化庁文化財部記念物課発行の『埋蔵文化財関係統計資料—平成28年度—』によると、総数3,993基と関東地方では千葉県に次いで2位、全国でも11位の多さであることが分かります。

群馬県では5世紀ごろ、上毛野国（かみつけのくに）と呼ばれていました。当時から、大きな河川があり、肥沃な土壌と平野が広がっており、稲作などの農業に適した土地でありました。また、ヤマトから東北地方へ経路にあり、重要な交通の要所でもあったと推測されます。そのため、力を蓄えた王や豪族が生まれ、この地域を支配していたと考えられます。さらに、日本へは中国や朝鮮半島などからの渡来人により、当時の大陸の最先端の文化・技術がもたらされたとされますが、上毛野国へも多くの文化や技術が伝わったことが古墳などの副葬品などからも推測され、東国文化の栄えた勢力の強い地域であったと考えられます。

(2)八幡塚古墳と観音山古墳の特徴

訪問した2つの古墳について、表1のように特徴をまとめてみました。保渡田八幡塚古墳は、綿貫観音山古墳に比べてやや早い時期に作られています。当時、榛名山で2回大きな噴火があったことにより、保渡田八幡塚古墳の付近の土地は火山灰などに埋もれ、この地域に住んでいた人々は移住せざるを得なくなり、土地が放置されたことにより、火山灰の下に埋もれたまま保存されたことが分かっています。その土地を離れた人々が、その後、綿貫観音山古墳の地域に移り住んで生活を始めたのではないかとの説もあるようです。

それぞれの古墳の大きさや形状は大きな違いはありませんが、埋葬方法には違いがあります。八幡塚古墳では舟形石棺に遺体が収められ、副葬品類は石棺の脇にある穴に埋められたと考えられています。観音山古墳の玄室では、遺体はスパンコールの布団が掛けられていただけで、石棺はありませんでした。また、副葬品類は遺体の枕元や足元に置かれていました。

一方、共通しているのは、人や動物を模った埴輪類に、武具、馬具、装飾品などが出土していることです。

表1：2つの古墳の特徴比較

	保渡田八幡塚古墳	綿貫観音山古墳
作られた時期	1500年以上前 5世紀後半から6世紀	1400年以上前 6世紀後半
大きさ「全体」・形	全長：102m 高さ：6m 前方後円墳	全長：97m 高さ：9.6m 前方後円墳
出土品数・種類	6000点以上 人型埴輪、動物型埴輪、副葬品	3346点以上 人型埴輪、動物型埴輪、副葬品

(3)石室の中に収められているもの。

保渡田八幡塚古墳では一部盗掘されていたため、石室から副葬品はあまり出土していませんが、古墳の後円部では舟型石棺石の棺桶(写真4)が出土しました。出土した副葬品の例としては馬具や、神にささげたとされるものなどです。

綿貫観音山古墳の石室は主に玄室(げんしつ)、羨道(せんどう)からできていて(資料1)、玄室に埋葬された人の遺体や、装飾品などが収められていました。(表2)

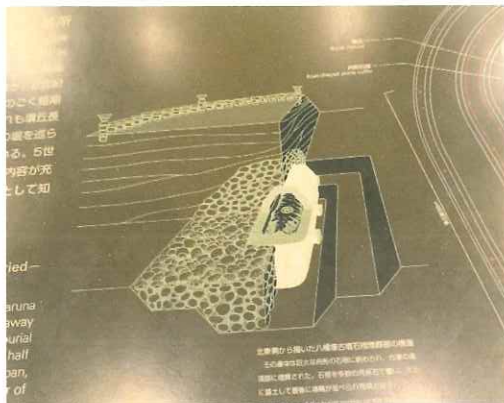


写真4：八幡塚古墳の石室
かみつけの里博物館展示
「王の墓を探る」より



資料1：CGで再現された観音山古墳の石室
参考文献(1)より引用



写真5：復元された
保渡田八幡塚古墳の石室



写真6：復元された
綿貫観音山古墳の石室

表2：2つの古墳の埋葬品比較

	保渡田八幡塚古墳	綿貫観音山古墳
玄室・副葬品	竪穴式石室 舟形石棺 玄室の横にある穴に副葬品が収められていた。 神にささげたもの、飾履、丸木弓、漆黒弓、馬具、ガラス玉等	横穴式石室 スパンコール 副葬品が、遺体を取り巻くように収められていた。 須恵器、兜、馬具、銅鏡、太刀等

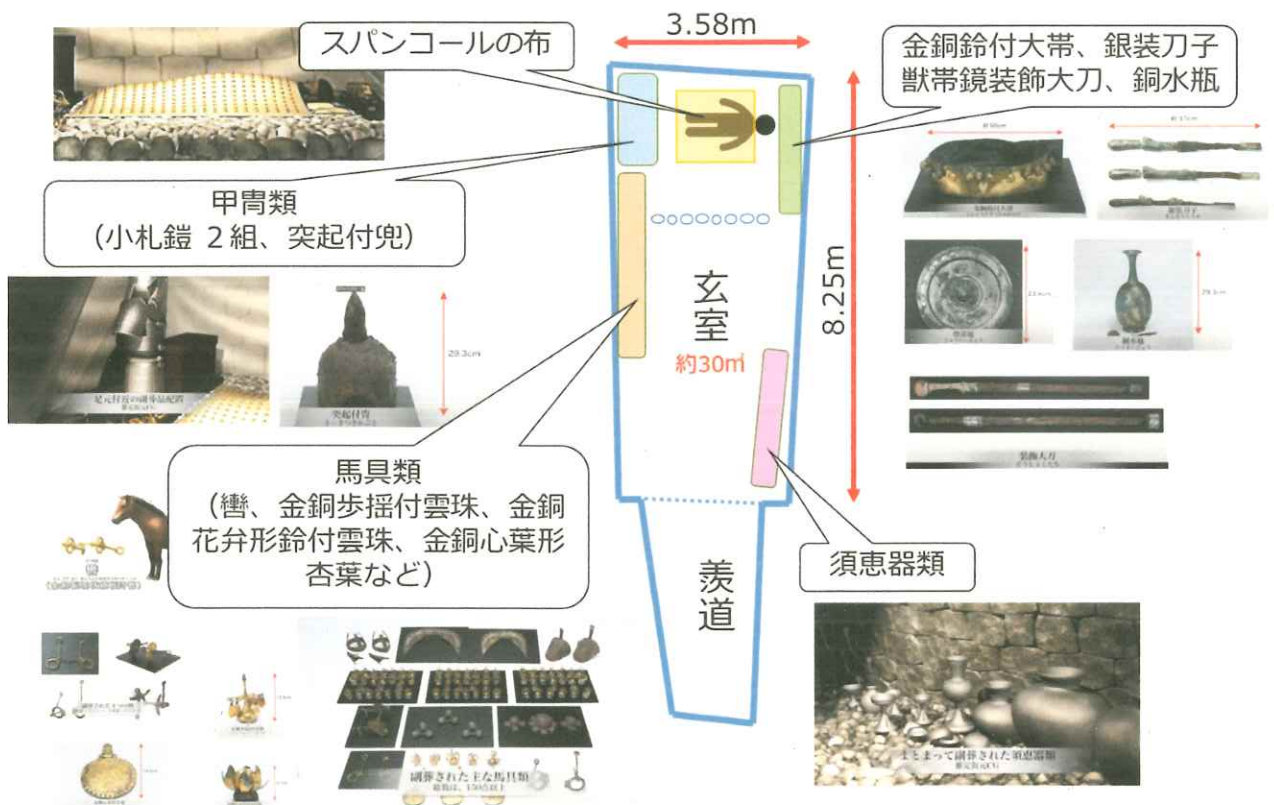


図1：綿貫観音山古墳の石室と発掘された埋葬品

参考文献(1)より引用、作成

綿貫観音山古墳の玄室は、発掘時の状態の良さから副葬品の埋葬位置なども詳細に推定されています。図1に示すように遺体の枕元には、銀装刀子(ぎんそうとうす)、獸帯鏡裝飾大刀(じゅうたいきょうそうしよくたち)、金銅鈴付大帯(こんどうすずづけおおおび)など、遺体の足元には、兜(かぶと)などの甲冑類(かっちゅうるい)や馬具など、主にその王や豪族の位を表すための、重要な装飾品や戦いに関するものが収められていました。また端には須恵器類なども置かれていました。

石室の中には、多種多様な副葬品があり、その王や豪族が自分の地位を表している馬具や、太刀、甲冑類などで、裕福であったことを物語っています。須恵器類などは、朝鮮半島や、中国などの進んだ文化を取り入れていることも示しています。

綿貫観音山古墳の石室は、県内最大級の石室で、石室の全長は約12.6メートル、玄室の長さが約8.2メートル、幅3.8メートル、高さ2.3メートルです。また、石室は崩れていたため、盗掘されていなかったことは、この規模の古墳としては全国的に見ても、とても珍しいそうです。また、天井の石は藤岡市金井地区等で産出した、牛伏砂岩の巨石(最大の石は重さ22トン)のものを6つ使用しているそうです。

(4)群馬県における、馬の歴史

魏志倭人伝には、「倭には馬がない。」と記されていました。縄文時代や弥生時代の遺跡からは、馬の骨などの出土品が一部見ついているようですが、最新の研究結果では、他の時代のものが縄文時代などの地層に紛れ込んだものであり、現時点では、その当時は日本には馬が存在しなかったとする説のほうが有力だと言われています。

日本において馬の存在が明確になっているのは、5世紀中ごろ以降（西暦450年ごろ）の各地の遺跡から出土した「馬の骨・歯」「馬具」「馬の形の埴輪」という三つの遺物などです。このころに馬の飼育が定着した証拠とされています。また、4世紀末から5世紀末にかけて、日本から倭兵が朝鮮半島の高句麗に攻撃をした際に、騎馬民族をルーツとする高句麗軍が馬を戦いに用いているのを見たことがきっかけで、朝鮮半島から多くの馬を連れてくるきっかけとなったという説もあります。

これらのことから、馬や馬具は古墳時代に朝鮮半島からもたらされたとされています。また、馬と同時に馬を世話する馬飼いや馬具をつくる職人なども、畿内や中部高地などで「馬飼い集団」の存在が明らかにされていることから、同時期に海を越えて日本へやってきたとされています。また、この馬飼い集団たちにより、馬の国産化も進みました。そのため、古墳時代から急激に、馬の普及率が高まっていったと考えられています。

馬の文化が急速に日本中に広まり、馬を飼育する牧もこのころから全国に見ついています。群馬県においても、高崎市域の丘陵地帯に5世紀中頃の「馬飼い集落」の存在が想定されており、渋川市子持山東南麓では馬の放牧地、馬牧（うままき＝馬の飼育場）が6世紀中葉の軽石層（軽石が集まった層）の下から広範囲に発見されています。

しかし、当時の人々にとっては、馬はとても高価なものにあったのに違いありません。例えば、馬は移動手段として優秀な乗り物で、とても便利でしたが、飼育や調教、馬具類の製作には高度な技術が必要であるため、王や豪族は、良い馬や、装飾を付けたものに乗ることで、自分の財力や権力を象徴するステータスシンボルとして、昔から大切にされてきたと思われれます。

当時の馬の用途には主に2種類あり、飾り馬と軍馬などの実用馬があったとされています。飾り馬のほうは、金・銀の馬具をつけた馬でした。一方、実用馬は鉄や木で作られた質素な馬具で、飾り板などもない馬です。実用馬は小さい古墳からも出土していて、実際に戦いなどに用いられたとされています。出土した2種類の馬具を比較して考えてみると、飾り馬が装着している装飾馬具は出土品全体の約20%で、実用馬が装着している馬具は、残り約80%を占めています。

飾り馬に乗れるような人は、王や豪族しかいなかった状況だったと考えることができます。

馬型埴輪にも飾り馬と実用馬の2種類があり、これも同様に自分が所有していた馬の数や権力を示すために作られました。下の（写真7）は、八幡塚古墳から出土した飾り馬ですが、あまり装飾されていません。しかし、（写真8）は、綿貫観音山古墳から出土した飾り馬ですが、頭の部分はないですが、胴体や、尾の方にはたくさんの副葬品がつけられていることが分かります。そのため、飾り馬は、綿貫観音山古墳に収められた王や豪族の権力が強かったことがこの写真からも分かりました。

また、写真ではわかりにくいですが、（写真7、8）の大きさを比べても、綿貫観音山古墳の馬型埴輪の方が大きく、これも、2つの古墳を比べるうえで、大切になってくると思われました。



写真7：八幡塚古墳の埴輪

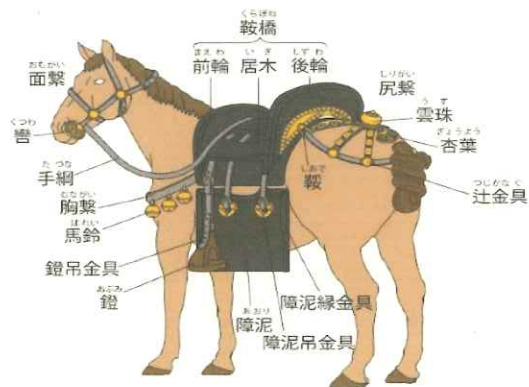


写真8：観音山古墳の埴輪

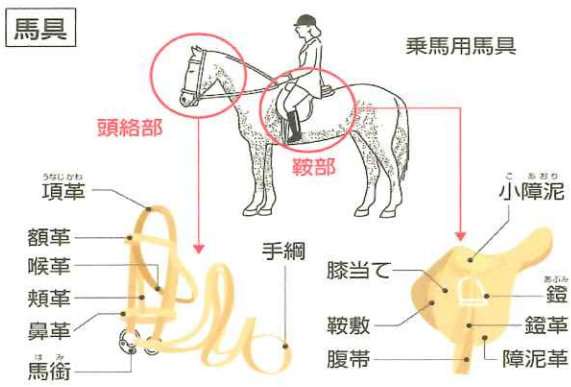
(5)昔と今の馬の馬具の共通点、相違点

馬具について調べるに当たり、群馬馬事公苑に足を運び、資料を集めたり、馬を観察したりしました。群馬県立歴史博物館の説明員の方が現代の馬具と古墳時代の実用馬の馬具はあまり変わらないとおっしゃっていました。資料を集めて比較してみると、名称など形状は変わっているものもあったが、馬を操作するための役割は同じのものが多いことが分かりました。また、相違点としては、昔の飾り馬の方が、今の馬と比べると、飾りの量が断然多いという所です。

また、装飾を増やすほど、重くなり馬に負担がかかるというデメリットがあります。現在などでは、祭りや式典などおめでたい日に馬の装飾を見ることがありますが、これは、古墳時代の飾り馬以上に装飾をしているため、短期間となりますが、馬のスタミナが必要になると思います。



資料2：古墳時代の馬具（飾り馬）



資料3：現代の乗馬用馬具



写真10：馬事公苑の引馬



写真11：馬事公苑の引馬

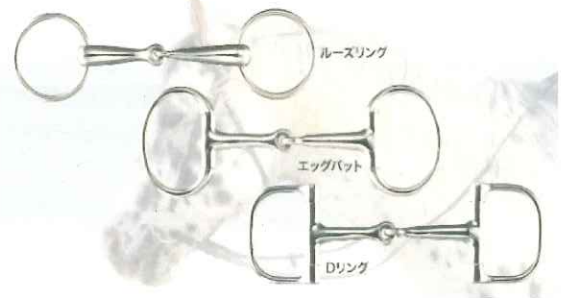


写真12：チャグチャグ馬コ
盛岡市 HP

さらに詳しく馬具の部分ごとにいくつか比較をしてみました。

①轡(くつわ)、ハミ

金属性の道具であり、馬を制御することに使います。轡は、その部分と、手綱を結ぶ輪の部分も含めて轡と呼んでいます。現在では、轡ではなく「ハミ」と標記されることが多いです。また、馬の口に入る部分は、「ハミ身」と呼んでいるそうです。当時は、轡の形は、ほぼ全て、リング型の物でしたが、現在では、轡にも形が何種類もあり、それぞれの馬に合ったものを選ぶことができます。



資料4：現代のハミ

②鞍(くら)

人が馬に座するためのいわゆる座席のような物です。また、人を乗せる以外に、荷物を乗せたり、馬車や、唐耒(からすき=農具の一種)を引くために固定する道具も鞍と呼びます。現在では、鞍の多くは革製であります。しかし、日本は昔、鞍は革製のものではなく、木製のものもありました。

現在乗馬等に使用されている鞍には主に2種類あり、ウェスタン(アメリカ式)とブリティッシュ(ヨーロッパ式)のものに分けることができ、その他にも実用馬と、競技場のように、別の形で区分もされています。

③鐙(あぶみ)

鐙革(あぶみがわ)で鞍から左右1対ずつ吊り下げ、騎乗する際にそこに足をかけ、動いている時に、足をのせる働きをします。乗馬の基本としては足を鐙には深く通さずに爪先だけのせるようにして使います。現在では、ほとんどの鐙は、金属製、プラスチック製または革製ですが、昔は、金属製が主流でした。木製のものも見つかっています。鐙ができるまでは、足を馬の胴を締め付けて乗馬していました。鐙がないと、姿勢が不安定になり、馬の激しい動きに追従するのは難しかったそうです。特に軍事目的で戦う場合、不安定な姿勢で、武器を使うことは極めて困難でした。そのため、長期間訓練してできるごく一部の貴族階級の人だけがこの技術を持っていました。しかし、鐙が開発されてから、ある程度訓練して、家庭が裕福なところは、馬を乗るようになっていきました。古墳時代のころは、馬の普及率はとても低かったです。また、鐙にも様々な形があり、馬の好みなどに応じて形も色々あります。過去の形の鐙が、現在でもほぼ同じ形で、使われています。つまり、昔から同じものが好まれ、それが一番使いやすかったことを示しています。つまり、昔の技術も怠らないほど進歩し続けていたということもわかります。

④手綱(たづな)

手綱は、乗馬する際に、馬とコンタクトをとるための道具の一つであり、ハミに直接つながられています。騎手は、手綱を使い、馬の操作(左右の方向指示や、止まれる合図)をします。また、上級者は、この手綱と、その他の扶助(馬に合図、指示を伝える、馬の運動の補助をするための動作)と組み合わせて、より高度で複雑な運動を指示することもできます。手綱も他の馬具と同様に、馬の性質や用途に応じて多様な種類に分けることができます。手綱のものは革製のものが主流ですが他にも革製、ゴム製、毛手綱や、布手綱など、見た目はあまり昔と変わりませんが、それぞれの馬に合った種類のもので、乗馬をしています。

表3：古墳時代と、現代の馬具の違い

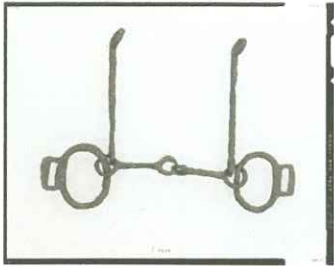
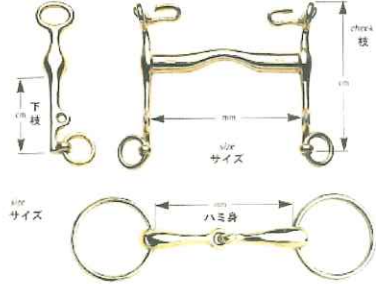






	古墳時代	現在
轡 (くつわ) ハミ		
鞍 (くら)		
鐙 (あぶみ)		
手綱(たづな)		

表3からわかるように、基本の馬具とその用途は変わっていないということが分かります。

鞍は、用途によって様々な形、材料が使われますが、古墳時代には加工しやすい木製の鞍が使われていました。現在では、革の加工技術の進歩により、丈夫で安定性のある革製の鞍が主流になっています。

鐙は、馬に乗っている時に足を乗せる場所として、変わりなく昔から使われ続けています。金属製、木製が古くから使われてきました。最近ではより軽量化のためプラスチック製やウエスタン乗馬では革製などの鐙も使われています。

馬具の中で、一番変わっていないものは、手綱です。馬に手綱をかける方法もほぼ同じです。このように、昔からほぼそのまま使われ続けたものもあるということもこの表からも見えてきます。

4. 考察及びまとめ

古墳時代の馬文化 ～馬具の歴史と現代との比較～ をテーマに資料などを参考にして考えてきて、古墳時代は朝鮮半島や、中国大陸からの物資の量も増え、また、渡来人がもたらした新しい技術や文化などにより、日本の文化、技術が多岐にわたり大きく変化した時代と考えられます。また、それらによって当時の日本(倭)にとっては、より一層発展できた時期ともいうことができると思いました。

馬具の種類や役割などについても調べたことで、当時の渡来人のもたらした技術レベルの高さを感じることができました。

他にも、渡来人によって、鉄器や、青銅器、須恵器など多種多様のものが伝えられ、これらの技術や、文化が群馬県へ伝わるのが比較的早く、石室の中からも見つかりましたが、なぜ群馬県では伝わるのが早かったのか気になりました。

今では朝鮮半島や中国大陸から日本に渡るには、簡単なことですが、当時、朝鮮半島から日本海を渡るルートは対馬海峡からか、日本海を渡るしかなく、渡来品や技術が伝わるのは、近畿地方のヤマト政権が成立した地域や日本海側の土地を中心に伝わり始めるのではないかと考えました。

また、仮に太平洋側から海のルートで九州や近畿から交易のルートができたとしても、群馬県は、海なし県で、どちらにしろ、様々な技術や文化が伝わるのは遅い方だと考えたからです。

群馬県がとても重要な地域で、有力な豪族が居たためと考えられていますが、私としてまだ謎が多い事だと思いました。

それとは別に、なぜ、日本に馬自体が伝わるのは遅かったのか考えてみました。

私が考えた1つ目の説は、その古墳時代以前は、馬などの大型動物を運べるような大きな船を作る技術が未熟だったということです。馬がもし船の中で転んだとすると、身体を傷つけてしまい、骨折を起こすこともありえるでしょう。また、わずかな頭数だけ運ぶのは効率が悪くなってしまいます。すると、馬に被害を与えない安定した航行ができ、ある程度多くの馬を効率よく運ぶことを考えると、大きな船が必要になります。そのための技術が古墳時代以降に確立されたからではないかと考えました。

2つ目の説は、朝鮮半島や中国大陸の国々が、日本に乗馬技術を伝えたくなかったという説です。日本の古墳時代の前から、朝鮮半島では、高句麗、新羅、百済が対立していた時期でした。その時に、「日本に進んだ文化を伝えてしまうと、もしかしたら自分たちの敵となってしまうかもしれない」という考えがあり、日本に伝えないようにしていたという考えもあります。

最後の説として、朝鮮半島は、馬を育てる土地にあまり適していなかったため、遊牧民(騎馬民族)を先祖に持ち強力な騎馬軍団を率いる高句麗に対して、日本と交流の多かった南部の百済、新羅、伽耶地域には馬に関する高い技術が少なく、敵対関係にあった高句麗から技術や人を獲得するには時間がかかったのではないかとこの考えです。

いくつかの資料で様々な推測をすることができますが、8世紀に日本最古の歴史書である古事記が編纂される前の時代であり、古墳の出土品や中国などの文献から当時のヤマト王権や朝鮮半島の状況を詳細に知ることは難しく、断定できることが少ないと思いました。

コラム “世界の有名ブランドのルーツは馬具メーカー”

世界に名を知られていて、日本でも人気の一流ブランドもルーツは馬具メーカーだったりします。エルメス、ダンヒルなどは、高級馬具メーカーとしての歴史があります。またグッチも創業初期は馬具を扱っていたようです。馬具の製作において、高度な革の鞣し技術などをハンドバックなどに応用して、現在ではハイブランドメーカーとして成長しています。

5.感想

今回、東国文化自由研究を通して、今まで知らなかった古墳の歴史までしっかりと知ることができました。特に、馬具という視点から詳しく調べて、昔と今では、あまり変わらないという所に驚きました。しかし、馬具の名称や形、材料などは少しずつ変わってきているということが分かり、より便利になってきていることが分かりました。世界で馬の家畜化が始まったのは、今から5500年も前の紀元前3500年頃とされているようですが、1500年前には、馬具に関する基本的な技術は完成しており、近年、バスや電車などの公共交通機関や自動車などが発明されるまでは、馬は移動、軍馬、農耕馬、荷役馬など様々な私たちの生活を支える役割を担ってきたことに、改めて感動しました。

また、当時の人々にとって馬はとても貴重なものであったことにも驚きました。私は、朝鮮半島などから伝わってきて、すぐに馬の普及率は、どんどん増えると思っていました。しかし、当時は馬を飼う場所などが不十分であったため、普及率は非常に低く、国産の馬はなかなか増えませんでした。

大陸や朝鮮半島から馬がどのように日本に伝わってきたかの考察については、推理小説を読んでいるような、ワクワクとした気持ちにもなり、楽しめました。さらに、資料館などの職員の方々や研究者の方の話も、聞いてみたいと思いました。

6.参考文献

<インターネットサイト>

- (1)YouTube channel tsulunon ～群馬県公式～ <https://www.youtube.com/c/tsulunon>
群馬県立歴史博物館 第101回企画展「綿貫観音山古墳のすべて」オンライン企画
綿貫観音山古墳の世界 右島和夫特別館長
 - (2)群馬県ホームページ <https://www.pref.gunma.jp/>
東国文化ポータルサイト <https://www.pref.gunma.jp/01/tougoku.html>
文化財 https://www.pref.gunma.jp/cate_list/ct00001252.html
 - (3)群馬の情報サイト 保渡田八幡塚古墳 <https://we-love.gunma.jp/kanko/hachimanduka>
 - (4)ググっとぐんま公式サイト | 群馬観光案内 <https://gunma-dc.net/>
 - (5)群馬県立歴史博物館 <https://grekisi.pref.gunma.jp/>
 - (6)高崎市ホームページ 高崎市の文化財 <https://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2013121600101/>
 - (7)広島県教育委員会ホームページ <https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/>
ホットライン教育ひろしま <https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/rekishih/kouko-siryou2.html>
 - (8)TBS 世界ふしぎ発見 <https://topics.tbs.co.jp/article/detail/?id=9916>
 - (9)コトバンク <https://kotobank.jp/>
 - (10)ウィキペディア フリー百科事典 (軍馬、鎧、鞍) <https://ja.wikipedia.org/wiki/>
 - (11)日本旅マガジン Powered by プレスマンユニオン <https://tabi-mag.jp/gu0217/>
 - (12)刀剣ワールド 馬具の種類と歴史 <https://www.touken-world.jp/tips/40362/>
- <書籍>
- (13)「馬」が動かした日本史』(蒲池 明弘著 文春新書)
 - (14)Challenge Riding 初心者のための乗馬テキスト改訂版 公益財団法人 群馬県馬事公苑